

インタビュー 多様な人々が集まる国で

母親の目から見たシンガポールでの学校生活は。

元シンガポール在住
宮本久美子さん

毎日5人分のお弁当作り

結婚してすぐ、1999年から2001年までの約3年間を、夫の転勤先のタイ(バンコク)で過ごしました。長男はバンコクで生まれました。

その後、しばらく間を置いて2014年にシンガポールへ。子どもは5人に増えていて、当時、長男は中学3年生、次男は小学6年生、三男は4年生、双子の長女と次女は1年生でした。

長男と次男はそれぞれ卒業を控えた最終学年、日本の友人との別れはとても辛かったと思います。小4の三男はシンガポールから、日本にいた時のクラスの先生や友人に手紙を書いて送ったところ、クラス全員からメッセージやビデオレターが届き、とても感動していました。

シンガポールは東京23区と同程度の面積の小さな国ですが、世界中の企業が進出し拠点を構えています。民族は中華系以外に、マレー系、インド系など。言語も国語であるマレー語のほか、公用語として英語、中国語、マレー語、タミル語が用いられています。子どもたちが通っていた日本人学校の授業は、日本の学校とほとんど変わりません。ただ、英語の授業は小学校1年生からあり、シンガポール人の先生に習います。多様な人々が集まるシンガポールでは、コミュニケーションツールとしての英語は欠かすことができないのだと改めて感じました。

日本人学校では現地社会との交流も行われます。近所の市場での買い物や見学、市内への遠

足などがありました。また、現地校との交流も盛んで、地元の小学校に遊びに行ったり、遊びに来てもらったり。多くの外国の人たちと接することができる環境が整っていました。

私にとって何よりも大変だったのは、毎日5人分のお弁当作りとスクールバスのバスストップまでの送迎です。学校でお弁当を買うこともできたのですが、5人分では高くついてしまいます。日本の食材を売っている日系スーパーは割高なため、主にローカルスーパーで買い物をするなど、工夫しながらのお弁当作りでした。早朝5時から準備を始めて、7時前には家を出なければなりません。子どもたちを学校へ送り出すまでの時間

は、ばたばたと戦場のよう。幸い学校の行事などで、日本人のママ友がすぐにでき、いろいろなことを教えてもらいながら、こうした生活にも



ホーカー(屋台街)への遠足



休み時間のドッジボール



チャンギ小学校
卒業を祝う会